

現代フランドレン地域主義のダイナミクス ——並立する2つの右派ポピュリスト政党

柴田拓海
SHIBATA, Takumi

はじめに

世界各地で外国人に対する排除を訴える政党や政治運動が勢いを増している。ベルギーにおいてもフランドレンの独立と外国人の排除を標榜する極右政党VB(フラームス・ブロック)が1980年代後半から台頭を続け、1991年総選挙での台頭が「黒い日曜日」と呼ばれるほどにベルギー政治に衝撃を与えた。極右の台頭に民主主義の危機を感じた既成政党はこれに対して強硬な策に出る。それがVBとの非協力を貫く「防疫線 (cordon sanitaire)」である。「防疫線」によるVBの排除はベルギー国内だけでなく欧州や地方レベルの議会や選挙においても徹底された。VBは政治的に孤立しつつも、それがエリートたちによる談合政治によるものだと批判。党が人種差別や外国人排斥で有罪判決を受けた危機を受けると、党名をフラームス・ブロック(Blok)からフラームス・ベラング(「関心」を意味するBelang。略称は元と同じVB)に変更。外国人の人権を侵害する政党から「普通の政党」になったことをアピールする¹ことで党勢を拡大してきた。

しかし、2010年代に入ってVB同様フランドレンの民族主義・地域主義を訴える一方、過激派からは距離を置いた地域主義政党、N-VA(新フランドレン同盟)が選挙で台頭してくるとVBの議席は減少に転じる。2007年の総選挙ではフランドレンの約18%の得票で17議席を獲得していたが、2010年には約13%(12議席)に減少。2014年総選挙では前回からさらに得票を半減させる約6%(3議席)という歴史的な大敗を喫した。フランドレンにおける極右ポピュリストの試みは防疫線というデモクラシーの防波堤に加え、穏健なフランドレン地域主義政党N-VAの登場により阻止されたかのように思われた。

ところが、2019年5月に行われた総選挙でVBは前回から15議席増やしてフランドレン第2党にまで躍進する復活劇を遂げる。同年9月13日にはフランドレンの世論調査でVBが最大

¹ それまでVBに関する報道はメディアも慎重であったが、この路線変更はマスコミに好意的に受け止められた。フランドレンの大手日刊紙De StandaardとDe Morgenは当時のVB党首フィリップ・デウインテルに関する論説やインタビューを掲載。それを皮切りにフランドレンのメディアは報道でVBを排除するのではなく、多様な意見の一つとして取り上げるようになっていった(de Jonge 2021, 165-168)。

の支持(24.9%)を得ているとの報道(Het Laatste Nieuws 2019a)があり、VB党首のトム・ファン・グリーケンはこのを受けて2024年の次期総選挙でフランデレン第1党となることを目指す「ミッション2024」を宣言した。VBのねらいは最多の議席を獲得して交渉の主導権を握ることで「防疫線」を打破することであり、「ミッション2024」の発表はそれが現実的に可能な範囲にまで達していることを意味する。

しかしながら、このミッション達成に立ちほだかる最大の障害は先にも述べたN-VAの存在であろう。N-VAは2004年のフランデレン議会選挙でキリスト教民主主義政党、CD&V(キリスト教民主フラームス)と選挙協力を組んで最大勢力となり、それから2023年現在に至るまでのほとんどの期間にわたってフランデレン政府与党を担当している。続く2007年の連邦議会選でも最大勢力となるが、連邦政府の連立交渉を巡ってCD&Vと決裂。その以降の選挙戦はN-VA単独で戦うことになった。そうした状況にでも党は連邦下院、フランデレン議会ともにフランデレン第一党の地位を確固たるものにしており、中間団体の支持を取り付けるなどもはや一つの「柱²⁾」になりつつあることも指摘されている(松尾 2015, 160-163)。

VBはフランデレンで既に支持を固めたN-VAにどう対処するのか。あくまでもN-VAは別の政党として対決を続けるのか、何らかの協力関係を結ぶのか。それはフランデレンの政治、ひいてはベルギーの政治の今後を左右する重要な問題である。実際、もし仮に選挙でVBとN-VAが過半数を占めることができた場合、VBはN-VAと協力することに前向きだが、N-VA側はそれに否定的な立場を貫いている(Grommen 2021)。しかしながら、情勢が変化して両者が歩み寄る可能性は十分にあり、他党の関係者³⁾は連立関係の構築に警戒感を示している。

本稿はその問いの答えを出すための下準備として並立するベルギーの地域主義政党⁴⁾の特徴・議論を整理するものだ。最初にベルギーにおける右派ポピュリストの源流となっているフランデレン地域主義の文脈について整理した後、VBとN-VAがポピュリストの要素を持ち

²⁾ オランダやベルギーの社会を「柱状化(verzuiling)社会」と呼ぶことがある。「柱(zuil)」はカトリック、社会民主主義、自由民主主義といったイデオロギー別に組織化された団体(政党・組合・教会など)によって構成される。

³⁾ CD&Vのベルギー元首相マーク・エイスケンス(Eyskens 2019)やPVDA(オランダ語圏のベルギー労働者党)の議員ローニス・ログヘ(Logghe 2020)など。

⁴⁾ 元柔道コーチのジャン＝マリー・ルイ・デデッカー率いるLDD(リスト・デデッカー)もVBと共通点の多い右派政党であった。しかしながら、民族主義よりも新自由主義に傾倒しており、2010年選挙で連邦議会での議席を失っている。そのため今回は議論の対象に含めないことにした。

合わせていることを論じる。本論では同一地域内にある程度の規模を誇り、同じような目標を掲げる右派ポピュリスト政党が2つもあるという世界的にもまれな現象に焦点を当て、フランドレンの2つの右派ポピュリスト政党には反発する力と共振する力という独自の力学があることについて説明する。その後、ポピュリスト的な地域主義政党が複数あることの効果について論じた後、結論として議論を総括する。

1. フランドレン地域主義の系譜

現代のフランドレンにおける地域主義やポピュリズムについて論じる前にまず、その成り立ちと発展について整理する必要がある。フランドレン運動が発展した経緯、それがポピュリズムと結びついた経緯を知ることは、現代ベルギー政治をより深く考察する一助になるからだ。

ベルギー建国以前の中世、現在のベルギーにあたるフランドル（フランドレン、南ネーデルラント）は毛織物業が盛んな地域として大国同士の支配権争いが多い地域であった。1795年、フランス革命戦争により南ネーデルラントはフランスに占領され、97年にはフランス領として認められることになった。その際、フランスはフランス式の改革を強行し、フランス語での教育・公務が強制された。元々フランス語を母語としていたワロンの人々はエリートになることができたが、オランダ語を母語とするフランドレンの人々にとってはその資格が厳しいものとなった。

その後、フランスがナポレオン戦争で敗北するとウィーン会議でフランスに支配されていたネーデルラントはオランダと併合され、ネーデルラント連合王国となった。オランダ人の王、ウィレム1世はワロンでもオランダ語を公用語にし、広く信仰されていたカトリックの教育を廃止するよう強制した。また、議会でもベルギー人議員は少数であり、こうしたオランダの支配に南部のフランス語話者の不満は次第に大きくなっていった。

その不満は1830年の独立革命として爆発した。この独立の戦いは主にフランス語話者によって主導され、国家形成もフランス語を中心として行われた。そのためフランス語は事実上の⁵公用語に選ばれた。注意しておくべきは、この時点では独立を支持したフランドレン

⁵ 公用語がフランス語ただひとつとなったのは法律によって定められたからではない。①安定した国家運営には単一言語が不可欠であるという「信念」、②フランス語が他の言語よりも優れているという「確信」、③かつての支配者の言語を捨て去らなければならないという「感情」という3つの要因からフランス語を選択するのは「自明」で「自然」なものとして解されていたからである（石部 2011, 71-75）。

の人々もフランス語が公用語となることに特に異論はなかったという点である。指導者層のフランデレン人は日常的にフランス語を使用しており、オランダ語が話せたとしてもそれを人前で話すことは「恥」だという風潮もあったという（石部 2011, 8-9）。つまり、当時のフランス語はワロン人の言語というわけではなく、エリートの言語としてワロン人だけでなくフランデレン人にも使用されていた。一方、一般の大衆はその土地に固有の言語を話しており、それは単に「方言」として扱われていた。

ベルギーにおいて言語問題が政治化し、オランダ語を第二の公用語にすることを要求するフランダース運動が拡大した要因は複数ある。そのひとつが学校問題である。学校教育のあり方をめぐるとの問題は保守派と自由主義派にとって重要な政治的争点であった。教育においても当然フランス語が用いられていたのだが、1849年、ヘント大学とリエージュ大学の入試必須科目にオランダ語を含めるかが問題となった。この案は最終的に否決されたものの、その後も学校における言語の問題は政治的対立をもたらすことになる。

第二に、ベルギー国王となるレオポルド1世にオランダ語教育を施さなかった点である。レオポルドはまだ王子であった14歳のとき、自分がオランダ語を話せないことを公にしていた。王子自身はオランダ語を習得しようと努力したが、側近は言語問題を噴出させないためにオランダ語とは距離を取るべきだと進言した。フランデレンでは王子の教育が失敗したことを非難するデモが発生し、フランデレン運動拡大の一因となってしまった（松尾 2014, 68-70）。

第三に、1860年代にフランス語が理解できないフランデレン人が裁判において不利な判決を受ける事件が度重なって起きたことである。1863年、被告人のフランデレン人がオランダ語での弁護を禁止され実刑に処された。65年には殺人の容疑をかけられた2名のフランデレン人はフランス語を理解できず、彼らの弁護士はオランダ語を理解できないという状態で行われた裁判が無実にもかかわらず死刑判決が下された。

その他にも、カトリック政党が言語問題解決をアピールしたこと（松尾 2015, 21）、普仏戦争によってフランス語の優位性が揺らいだ（石部 2011, 88）ことなどの要因もある。いずれにせよ、多くの要因が重なってフランデレン運動は拡大し、1870年代から80年代にかけての言語法制定により公的領域におけるフランデレン語の使用が徐々に認められるようになった。

しかしながら、二度の大戦はベルギーの言語問題にファシズムという新たな対立軸を付け加え、問題を複雑にしていく。第一次世界大戦後の1919年選挙でフランデレン民族主義

を訴えるフロント党(Frontpartij)が議席を獲得。しかし、党内でファシズムに接近するグループとこれを批判する退役軍人からなるグループの対立が激化し、党は崩壊した。その後、フロント党のファシストグループによって新たにVNV（フランデレン民族同盟）が結成。ワロンでも極右カトリック政党のレックス党（Parti Rexiste）が1936年の選挙で第4党となった。これらの極右政党は第二次世界大戦でナチスによる占領統治に協力したことで戦後には非合法化された。戦後も新たな極右運動は両地域で見られたものの、主流なものにはならなかった。

フランデレンで地域主義が再び勢いづいたのは1953年のVU（フランデレン民族同盟）の結成がきっかけである。VUはフランデレンの自治拡大と段階的な独立を目標としており、かつてのナチ協力者が指導者にならないよう配慮した「民主的なフランデレン民族主義政党（de Jonge 2021）」であった。その一方で、ナチ協力者は独立欲求に満たされた善意の愛国者であるとし、VUは彼らに社会的保護を求めたために、支持層には極右メンバーもいた。

外的要因も地域主義を加熱させる方向に作用した。エイスケンス政権はフランデレンを中心に外国資本を誘致する一方、ワロンの産業に対しては投資を渋った。経済成長により発言力が増したフランデレン側は制度の見直しや権限の移譲を要求する傍ら、経済が停滞したワロン側は既得権益に固執したことで両地域の対立は激化した。特に言語境界線の確定をめぐる問題は各地でデモ運動などの混乱をもたらした。

こうした言語対立の激化、それによる地域アイデンティティの高まりにより地域主義政党は選挙で台頭した。1950年代後期には1議席に留まっていたVUは選挙を重ねるごとに議席を増やし、全盛期となる70年代には20議席以上を維持した。ワロンの地域主義政党も議席を伸ばし、1971年の選挙では全体の2割強をなんらかの地域主義政党が占める事態となった。

既成政党も言語対立の煽りを受けた。カトリックのルーヴェン大学⁶の言語をめぐる問題でキリスト教民主主義政党のCVP・PSCが言語別に分裂。さらに自由党もブリュッセルのフランス語話者の権利をめぐる対立し、フランデレンのPVV（自由進歩党）とワロンのPRL（自由改革党）に分裂。社会党もやや遅れて1978年にオランダ語系のSPとフランス語系のPSに分裂した。

⁶ ブリュッセル近郊にある名門大学。オランダ語圏にあるが、教育はフランス語で行われていた。フランデレン側はオランダ語圏に残るフランス語系大学に反感を示したが、大学は言語別に分割することを拒否した。

ベルギーにおける言語対立は最終的に連邦化へとつながった。1970年の憲法改正で言語共同体が規定され、77年には3つの言語共同体と3つの地域にそれぞれ政府を設置する「エフモント協定」が両地域のカトリック政党、社会党、地域主義政党の間で認められた。これにより、VUは初の政権入りを果たすことになったが、党内部や支持者からはエフモント協定に対する不満と協定を受け入れた党に対する不満が噴出。一部の急進派のメンバーは離党し、VNP（フランデレン民族党）とVVP（フランデレン人民党）を結成するに至った。この2つの政党が合流して1つになってできたのがVB（フラームス・ブロック）である。VBは結成初期こそは小政党であったが、1988年に地元アントウェルペン市議会選挙で17%の得票をするなど存在感を示した。党は地域主義に加えて反移民を訴えるようになり、90年代から2000年代にかけて議席を伸ばし続ける成長を見せた。

その一方で党勢が衰えたのがVUだった。ベルギーの連邦化は地域主義政党の要望を実現するものだったが、それは同時に党の存在意義を弱めてしまうものだった。70年代に20以上あった議席は90年代には1桁程度に落ち込み、一部議員が他党へ移籍するなど影響力はますます低下した。最終的にVUは2001年の党員投票により右派のN-VAと左派のSPIRIT⁷に分裂してその歴史を終えることになる。

現代のヨーロッパ政治において重要な争点となった移民問題もベルギーの場合、言語問題も絡んでくる。ベルギーでは移民の多くは首都ブリュッセルにやってくる。ブリュッセルは2言語併用地域として認められているが、地理的にはフランデレンの中にあり、歴史的にフランス語話者が多い。そうしたことからブリュッセルにやってきた移民もフランス語を使用する。フランデレン側にとってはそれだけでも好ましくないことであったが、フランス語系の政治家たちは外国人参政権の付与を提案。主にフランス語を使用するブリュッセルの移民に参政権を与えれば、ブリュッセルにおける言語の均衡が破壊させられるとVBをはじめとするフランデレンの諸政党は猛反発した（津田 2020）。

また、2008年以降のユーロ危機で経済や財政が争点になる中、N-VAは「不況にあえぐワロンとそれを支える豊かなフランデレン」というレトリックを用いて経済の問題を地域間の問題に結び付けた。その一方で、法人税の減税など具体的政策を訴えることでN-VAは地

⁷ SPIRIT はオランダ語圏社会党 SP の後継である sp.a（異なる社会党）と選挙協力を組み政権与党入りも果たすが、下野した後は分裂、一部メンバーの sp.a への合流、党名変更を経て最終的にオランダ語圏の環境政党 Groen!（緑！）に吸収合併された。

域主義だけでなく新自由主義の政党でもあると印象付けることに成功し、経営者団体の支持を取り付けている。

このようにフランデレン運動は要求が達成もしくは挫折するとまた新たな争点と結びついて展開してきたといえる。フランデレン運動は最初からフランデレンの自治や独立を目指したのではなく、初めはオランダ語話者とフランス語話者の非対称性の是正を要求したものであった。その要求が言語法成立によってある程度まで達成されると、運動は民族主義的性格を帯びる。第二次世界大戦中にVNVがナチスに協力した反省から、戦後になって結成されたVUは穏健なフランデレンの自治拡大を要求し、一定の支持を得た。VUの主張の一部はベルギーの連邦化によって実現するが、それは皮肉にも党の衰退を招いた。VUから分裂して新たに登場したVBは既成政党への反対と移民の排斥を訴えて急速に拡大した。その後VUから分裂して実質的な後継となったN-VAはより穏健な民族主義と国家改革を訴えて幅広い支持を獲得しており、フランデレン第一党の地位を確保した。このような経緯を経てベルギーの言語対立・地域対立は移民問題やエスタブリッシュメントへの反発という現代的なテーマと結びついた。

2. N-VAはポピュリストなのか

VBがポピュリストに分類されることにほとんど異議はないと思われる。ミュデの定義によれば、ポピュリズムとは「社会が究極的に『汚れなき人民』と『腐敗したエリート』という敵対する2つのグループに分かれていると考え、政治は人民の一般意志を表現するべきだと訴えるイデオロギー」(Mudde 2004, 543)であるという。VB党首のファン・グリーケンはこのエリート批判と民意の直接反映という定義に沿ったかのように自身の著書でエリートについて以下のように述べている。

エリートは有権者の意思を無視したり疑ったり嘲笑したりするのではなく、再び共通の利益に奉仕しなければならない。(中略)代議制民主主義が歪めたものを正すために、国民投票のような直接民主主義を取り入れなければならない。(Van Grieken 2017, 26-27)

また彼は「ポピュリスト」という言葉が悪口のように使われることに不快感を示しつつも、「ポピュリズムは人々の利益を代弁すること」であり、「国民の代表者はみなポピュリスト

であるべき」と持論を展開している (Van Grieken 2017, 21)。正しい意味で「ポピュリスト」と呼ばれることには本人も異論はないようである。

では、N-VAはどうだろうか。実のところ、N-VAをポピュリストと定義することには反対する声もある。ペーター・ファン・アルストとベンジャミン・デクリーンによれば、N-VAは確かにポピュリズム的な要素を持っているが、VBのような「完全なポピュリスト政党」ではないという。同党の言う「国民」は意味が限定されており、移民問題については穏健な中道右派の見地に立っており、有権者や他党が受け入れやすいためである (Van Aelst and De Cleen 2016)。しかし、「国民」の意味が限定されているのは外国人を市民の一員と認めようとするVBも同じであり、先程のミュデの定義に立ち返ればポピュリストであることに主張の過激さはさほど重視されないのではないだろうか。また、松尾秀哉は多くの識者がN-VAを一時的に成功したポピュリストとして分類したのであるから、後になってポピュリストでないとするのは一貫性がないと論じている (松尾 2017)。

N-VA党首バルト・デ・ウェーフェルは2019年の総選挙後の演説で次のように述べた。

今日は多くの敗者がいるが、同時に大きな勝者もいる。Vlaams Belangの選挙の勝利を祝いたい。フランデレンの有権者が発言したことであり、民主主義においては有権者が常に正しいのである。

しかし、有権者は非常に難しいカードも置いた。フランデレンは中道右派と右派を選択し、フラマン民族を選択する。それはこれまで以上に明確になった。一方、フランス語圏のベルギーは非常に左に寄った選択をする。その現実がこれほどまで離れたことはない。(De Wever 2019b)

デ・ウェーフェルは有権者が他の党を選んだとしてもそれが正しいと絶対視しているようである。有権者の意思を重んじる態度は「600万人のフランデレン人の利益を守る (N-VA 2014, 4-5)」という言葉にも現れているが、実際にはフランデレン全体3分の1程度の支持しか得られていないにもかかわらず、あたかもフランデレン全体の代表のように語ることには疑問視する声もある (Maly 2012)。

また、N-VAは「2つの民主主義」という概念を用いて現在のベルギーが各々の民族の意思を反映できなくなっていると説明する。彼らによれば、ベルギーには2つの言語、2つの文化、2つのメディア、2つの世論が存在し、真に単一の民主主義は存在しないという (De

Wever 2007)。デ・ウェーフェルはこれを「2つの民主主義があり、ベルギーはもはや民主主義ではない (N-VA 2020)」と表現している。そしてこの状態を解消するのがさらなる自治の拡大、連邦化であるというのが党の主張である (N-VA 2017)。実際、フランデレンでは保守政党が強いが、ワロンでは社会党が強固な地盤を築いており、長い期間連邦政府の与党の座についている。また、2016年にはEUとカナダとの間の包括的経済貿易協定がワロン議会の反対により承認できない事態に陥ったこともある。「ジャン＝マーク・ノレ⁸には彼の政策を実行する機会が与えられるべきだが、私はその代償を払いたくない (N-VA 2019)」というデ・ウェーフェルの言葉に象徴されるように、一域内での多数派に過ぎない政党が全国レベルでの政策決定にイニシアティブを持っていることにN-VAは疑問を呈している。

N-VAはまた、民主主義は出生に基づく者ではなく、選挙で選出された国家元首によって率いられるべきだとして君主制の廃止を訴えている (N-VA 2014)。ベルギーの歴史において国王が政治的影響力を及ぼした例には枚挙に暇がない⁹。N-VAは、このような国民が制御できない別の権力が存在し、政治に独自の役割を果たすということは民主主義の理念に反するものだとして認識している。こうした考え方はN-VAの裁判所に対する態度にも見て取れる。2016年、裁判所は難民へのビザ発給を拒否するN-VAのテオ・フランケン副大臣に一日あたり4,000ユーロの罰金を命じた。これに対し、N-VAは反発。Twitterで「#iksteuntheo (私はテオを支持します)」といったハッシュタグ運動を展開したほか、党首は裁判所が正義を執行するのではなく政治を行っているとして批判した (VRT nws 2016)。ここにもポピュリズムの要素であるエリート批判と純粋な民衆の声を反映させる営みとしての政治という側面を見出すことができる。

3. VB と N-VA の反発

前節ではVBとN-VAがともにポピュリスト的特徴を有した右派政党であるという共通点について説明したが、この節では相違点について論じる。確かにこの2党は多くの点で似通った点を持つが、それでも両者が一つの運動として統合されることはなく、独立した政党の

⁸ フランス語圏の緑の党、Ecolo党首。

⁹ 政府と協力し、普通選挙法や社会保障法などを成立させベルギーの民主化・近代化を推進したレオポルド2世、第二次世界大戦において政府に無断でドイツと講和したレオポルド3世、植民地コンゴの人々の感情を逆撫でする発言を繰り返し、その後のコンゴ動乱の原因となったボードゥアン1世、遅々として進まない政府の連立交渉に粘り強く対応したアルベール2世など。

ままであった。そこには両党の微妙なスタンスの違いがある。ここではそうした違いについて分離主義と外国人という主要なテーマとお互いの認識に絞って議論する。

VBもN-VAもともに地域主義、民族主義を訴える政党であるが、そのニュアンスは大きく違っている。両者ともベルギーは相容れない2つの民主主義が並列しており、効果的に政策を実行することができない状態に陥っているという点までは共有している。しかし、VBはその状態を解消するためにフランデレンの独立を目指している一方、N-VAは自治の拡大の結果として独立することはありうるにしても、即時の独立は考えていない。

N-VAは「フランデレンをベルギーから分離するつもりがない」としながらも、段階的な権限委譲を通じて最終的に「EU加盟国として独立したフランデレン」になることを目標としている(N-VA 2017)。N-VAのデ・ウェーフェル(Eyskens 2021)によれば、独立したフランデレンのEU加盟は不透明であるという。EUへの加盟には全加盟国の全会一致での承認が必要であり、ワロンとブリュッセルからなる残されたベルギーの反対に遭うかもしれないためである。さらに、彼は独立には公債の分配、ブリュッセル周辺の国境の決定、社会保障の分割などといった問題もあると指摘しており、ワロンの社会党PSとの交渉も考えている。

これに対してVB(Vlaams Belang 2019)は、「明日でも明後日でもなく今日」独立を果たすべきだと訴える。それが「非効率的で不条理的な構造から脱却」する「唯一の現実的な選択肢」なのだという。しかし、「フランス語話者はフランデレンを決して手放すことを望んでいない」ため、フランデレン独立は「ベルギーの合法性を破ることが前提」になる。具体的にはフランデレンで新たな国家形成に対する幅広い支持によってフランデレン国家の正当性を高め、ベルギーの合法性を上回ることで成し遂げられるとしている。このようなVBの議論にはワロン側との交渉・譲歩・妥協といった姿勢は見られない。

また、細かい点であるが、VBは独立したフランデレンがベルギーの後継国家となるべきであり、ブリュッセルは2言語併用地域としてフランデレンに属するとしている。しかし、N-VA党首はワロンとブリュッセルがベルギーの立場を引き継ぎ、フランデレンが分離独立をするという前提で議論をしている(Eyskens 2021)。N-VAのマニフェストでは「フランデレンにはブリュッセルに住むフラマン人も含まれる(N-VA 2001)」としているが、裏を返せばブリュッセルのワロン人はフランデレンには含まれないということである。このように、フランデレンの独立とブリュッセルの帰属という点においても両者は一致していない。

外国人に対する認識も異なっている。両者は不法移民を厳格に処罰する点では一致しているが、VBが移民ゼロを訴えるのに対し、N-VAは合法的な移民を積極的に受け入れようとしている。

1992年、VB（当時はVlaams Blok）は外国人政策の基本方針となる「70項目のプログラム」を発表した。同プログラムは非ヨーロッパからの移民禁止、無職の移民の強制国外退去、多文化主義の否定などが掲げられており、外国人ではなく自国民第一の政策を訴えていた。これが欧州人権条約に違反するものだと批判されると1996年には修正を余儀なくされ、人種差別で有罪判決を受けた2000年、党の穏健化を図る一環としてプログラムは破棄されることとなる。しかし、VBは「順応せよ、さもなくば引き返せ」というスローガンを掲げ、あらゆる面で自国民が優先されるべきと訴えるなど、党の本質は依然として変わってないとする向きも多い（Coffé 2005, 津田 2017）。

VBにとって外国人の大量流入はベルギーのアイデンティティ、安全、幸福を脅かし、相容れない文化、伝統、宗教を持ち込むものであり、そうした移民を受け入れるための莫大な費用は自国民の社会保障のために使われるべきだと考えている。そのため、国境をただちに閉鎖し、不法に入国した外国人は送還されなければならない、社会保障は自国民が優先されるべきだという（Vlaams Belang 2022a, Vlaams Belang 2022b）。こうした移民や難民に対する全面的な拒否の姿勢と自国民第一主義という姿勢がVBの対外国人政策の特徴である。また、実際に与党として難民政策に関わっているN-VAに対しては亡命希望者が減少していないことやアフターマティブ・アクションへの参加を根拠に批判している（Van Grieken 2017）。

一方、N-VAにとって移民とは「あらゆるテーマにおいて社会を強くする前向きなストーリーであるべき（N-VA 2021a）」である。つまり、自分たちの社会を発展させるために役立つべきものと捉えられている。党には外国にルーツを持つ議員¹⁰も所属しており、そのような主張を実証してみせている。また、同党は外国人労働者が高度に熟練した仕事に就きやすくしたり、外国人学生が労働市場にアクセスしやすくしたりするための制度を整えるべきだという。その一方でフランドレンに定住しようとする外国人は語学レッスンや統合プログラムを通じてフランドレン社会に統合されるという条件を課す。このようにN-VAは、

¹⁰ トルコ系クルド人で出稼ぎ労働者の両親のもとに生まれ、フランドレン政府の環境、法務、観光、エネルギー大臣を務めるスバル・デミルや、イラン出身で抗議活動に対するイラン政府の抑圧的な取り締まりから亡命し、現在はムスリム女性の権利向上を訴える下院議員のダリア・サファイなど。

移民に社会的、経済的に有用なものであるとして労働力と知識をもたらすような移民は積極的に受け入れたいと考えている。そこにはフランドレンがグローバル化によって利益を得ているということも関係する。1960年代から産業が衰退していったワロンを尻目にフランドレンは経済成長を続け、ブリュッセルやアントウェルペンといった都市はグローバル経済の中心地の一つとなっている。失業率も3.9% (STATISTIEK VLAANDEREN, 2022、以下同)とワロン (8.9%) やブリュッセル (12.5%)、EU全体 (7.1%) と比べても低水準であり、外国人が自国民の雇用を脅かすという脅威論はあまり見られない。

しかしながら、家族の呼び寄せによってやってくる移民に対しては統合のための手段を利用することが受け入れの条件としている。また、党は「努力する者には十分な機会を与え、肌の色や出身を理由に不利な立場に置かれてはならない (N-VA 2021b)」とする一方、移民が持つ独自の文化についてはあまり尊重する立場を取っていない。移民の社会的役割は認めるが、移民にはオランダ語を学び、ヨーロッパの価値観を尊重するという義務もあるという (N-VA 2021b)のが党のスタンスである。デ・ウェーフェル (De Wever 2019a)によれば、人々が長年信じてきた伝統にはその正しさにかかわらず価値があり、文化的相対主義はこの伝統の価値を無視しているのだという。さらに、彼はコミュニティを維持するために、政府の中立性、共同体言語の優位性、啓蒙主義、市民権の4つの要素からなるヨーロッパ文化の価値観について最低限のコンセンサスを得る必要があると主張する。

以上のように、同じフランドレンの右派ポピュリスト政党であるVBとN-VAは共にフランドレンの地域主義と外国人の大量流入に対する危機感を訴えているが、前提とする議論や細かな政策については違いが見られた。しかし、この違いが存在することをもって将来におけるVBとN-VAの協力や連立を否定することは難しい。なぜなら、ベルギーでは比例代表制が採用されており議席数が拮抗しやすく、現代では多党連立による政権樹立が一般的だからである。政党間の考えの違いを交渉や妥協によって調整しなければ連立政権は成り立たず、政権を目指すかぎり何らかの妥協は必須なのである。実際、VBは他の既成の政党と連立政権を担ったN-VAを批判しているが、連立を組む相手としては好意的な態度を示しており、もし仮に連立が現実的な状況ならばVBが譲歩する可能性は高いと思われる。ただし、問題は現状のN-VA党首がVBと組む気がないことだ。かねてよりN-VAはVBの外国人、特にイスラム教への攻撃を批判しており、度々対決する姿勢を見せている。2015年のシャルリー・エブド襲撃事件を受けてVB党首 (当時) のデウインテルは連邦議会でコーランを「諸悪の根源」と呼ぶなどイスラム教批判を展開したが、それを非難したのがN-VAのヤン・ヤ

ンボン内相（当時）だった。内相がデウィンテルの主張が無用な分断をもたらし、「他のいかなる政党からも支持されないであろう」と答えるとVB以外のほぼすべての政党から拍手を受ける場面があった（De Standaard 2015）。近年になってもN-VA党首デ・ウェーフェルはVBが「極右かつ極左である」と非難し（Eyskens 2021）、VB党首のフェイスブックは「嘘の攻撃で満ち溢れた下水道のようだ」と強い言葉で批判している（De Wever 2022）。さらに2024年の総選挙後の連立候補からも外す一方、イデオロギー的に遠い社会党との連立の可能性はあるとしている（Het Laatste Nieuws 2022）。N-VAは他の既成政党とともに防疫線の内側におり、すでに他党との連立実績もある。むやみにVBと接近して他の党の印象を悪くすればVBとともに政治的孤立に追い込まれる可能性があり、現時点では極右と距離を置いておいたほうが利益になるというのがN-VAの理論であろう。

4. VB と N-VA の共振

N-VAがVBとの協力に後ろ向きであるからといって、VBはなんの政治的影響力を及ぼさない孤立した勢力というわけではない。むしろN-VAの存在はVBの民族主義的、地域主義的な考えを反映した政策の一部を合法的に実施することに役立っているという指摘もある。例えば、VBが掲げた「70項目のプログラム」は激しく批判された末に撤回されたが、一部の政策はN-VAなどの政党によって前向きに検討され、実施されたものも存在する。例えば、N-VA議員のピーター・デルーバーはトルコのエルドアン大統領率いる与党AKPが欧州各国で集会を開いていることを受け、トルコによる集会の禁止と二重国籍の廃止を訴えた（De Roover 2017）。これは「70項目のプログラム」の13番目と31番目の項目に該当する。このように、激しい非難に晒された政策の一部でも再検討がなされているのが実情である。

加えて、VBの台頭によって既成政党も危機感を感じて党の改革やイメージの刷新を図る動きが見られた。多くのフランデレンの政党が2000年代初頭に軒並み党名を変更しているのはこの一環であると思われる。CVP（キリスト教人民党）はCD&V（キリスト教民主フレンムス）となり、SP（社会党）はsp.a¹¹（社会党・別）となっており、フランデレンの政党であることが強調されるようになった。

また、VBやN-VAの党員だった人物が移籍したり、ジャーナリストとして活動したりすることで極右思想を正常なものと思わせていることも指摘されている（Logghe 2020）。N-VA

¹¹ 2021年からは党名をVooruit（前へ）に変更している。

の元政治家で現役時は下院議長も務めたシークフリート・ブラックは2019年の選挙に落選するとジャーナリストの道歩んだ。彼はTwitterでVBやN-VAの政治家とともに新型コロナ対策を呼びかけるウイルス学の教授への攻撃に参加するなど右派的な論者として活動している。また、VBからN-VAに移籍する議員も増加しており、2012年には「70項目のプログラム」の起草に関わったユーヘン・シーダーもN-VAへ移籍している。こうしたVBからの政治家の流入はN-VAの右傾化を招くものとして党の内外から危惧されている。

以上のように、フランデレンの2つの地域主義政党は微妙な意見の違いから批判を交わす一方、主張や政策の一部を取り入れて実行に移すことも行われている。加えて、VBやN-VAのメンバーが別の場所に活動の場を移すことで過激な民族主義・地域主義などといった極右思想を広めることに貢献しているのだ。

まとめ

本稿ではフランデレン地域主義の成り立ちと現代におけるその担い手であるVBとN-VAのスタンスの違い、およびこの2党によって生じる独自の力学について整理した。

まず、言語対立と別のテーマが結びついてきたという歴史的な脈を整理した。最初期のフランデレン運動はフランス語話者有利の国家制度に対する不満を訴えるものであり、それは1870年代から80年代の言語法制定によって反映された。20世紀に入る運動は過激なナショナリズムやナチズムと結びつき、ナチスの占領政策に貢献した。終戦後、過激な民族運動が禁止されるとファシズムと距離を置いたVUが台頭し、穏健な形でフランデレンの自治拡大と独立を訴えるようになった。これはベルギーの連邦化という形で一定の要求が認められた。その後、VUから分裂したVBは外国人問題を、VUの実質的後継となったN-VAは地域間の経済格差と国家改革といった新たな論点を提示して活動しているのが現在というわけである。さらに、この2つの政党はエリートを批判し、フランデレン民族の純粋な意思が反映させようとするポピュリスト的手法を用いる点で共通していることが確認された。

フランデレン地域主義の力学における第一作用はVBとN-VAの反発だ。この2つの政党は共に連邦内におけるフランデレンの民族主義・地域主義を掲げ、移民の厳格化や分権化を主張するポピュリスト政党であるが、両者には微妙なスタンスの違いが存在する。それは両党が重視しているフランデレンの地域主義や外国人政策にも確認できる。もし仮に、他党が警戒するVBとN-VAの協力関係が成立するとするのであれば、この違いを克服するのは不可欠

であろう。ただし、現在のN-VA党首はそれに否定的な態度を示しており、実現は不透明である。

第二の作用は両党による共振だ。フランデレンの民族主義・地域主義政党が分裂しているから現代のフランデレン運動は脆弱であるという単純な話にはならない。むしろ、急進的な政党と穏健な政党が同時に存在することは、過激な主張の一部が穏健派の手で実現される可能性を開くことになる。また、党メンバーの移籍を通じて過激主義を「伝染」させたり、議員を辞めて政治以外のキャリアに転向することで極右的思想を広めたりすることもできる。

このように、ベルギーのフランデレンには各国のポピュリズムと同様の議論で説明できない力学が働いている。それは言語をめぐる歴史的対立と2つの有力な民族主義・地域主義政党が並立しているという特殊な事情によるものだ。本論はフランデレン運動を俯瞰した視点で整理したものであり、活動家・政治家個人の思想について深く立ち入ることはできなかった。今後の研究でそうしたものについて明らかにしていく必要性を感じた。

また、本稿はベルギーのフランデレン地方という欧州の小国のごく限られた地域における議論ではある。しかし、分離主義や民族間の対立は世界中で発生するものであり、政権を担うことになったポピュリズム政党に対してまた新たな批判勢力が登場しポピュリスト政党が並立する事態もありうるかもしれない。その際に本稿が考察の一助になれば幸いである。

参考文献

- Abts, Koen, Emmanuel Dalle Mulle, and Rudi Laermans. (2019) "Beyond issue diversification: N-VA and the communitarisation of political, economic and cultural conflicts in Belgium." *West European Politics* 42, no. 4: 848-872.
- Algemeen Dagblad.(2016/7/12) *Steeds meer politici van Vlaams Belang lopen over naar N-VA*. <https://www.ad.nl/buitenland/steeds-meer-politici-van-vlaams-belang-lopen-over-naar-n-va~a128adb1/> (accessed 1 21, 2023).
- Casteels, Peter, and Simon Demeulemeester.(2016/3/23) *70 puntenplan van het Vlaams Blok: wat werd uitgevoerd en wat niet?*. <https://www.knack.be/nieuws/70-puntenplan-van-het-vlaams-blok-wat-werd-uitgevoerd-en-wat-niet/> (accessed 1 21, 2021).

- Coffé, Hilde.(2005) "The adaptation of the extreme right's discourse: the case of the Vlaams Blok." *ETHICAL PERSPECTIVES*, 205-230.
- de Jonge, Léonie.(2021) *The Success and Failure of Right-Wing Populist Parties in the Benelux Countries*. Routledge.
- De Roover, Peter .(2017/3/6) '*Straf dat in België bijeenkomsten worden georganiseerd om het Ottomaanse Rijk 2.0 in te voeren*'. <https://www.knack.be/nieuws/straf-dat-in-belgie-bijeenkomsten-woorden-georganiseerd-om-het-ottomaanse-rijk-2-0-in-te-voeren/> (accessed 1 21, 2023).
- De Standaard.(2015/1/22) *Dewinter noemt Koran 'bron van alle kwaad'*.
https://www.standaard.be/cnt/dmf20150122_01488070 (accessed 1 21, 2023).
- De Wever, Bart.(2019a) *BART DE WEVER over identiteit*. Borgerhoff & Lamberigts.
- De Wever, Bart.(2019b) *Bart De Wever reageert op de verkiezingsuitslag: de volledige toespraak*. 5 26, 2019b. <https://www.n-va.be/nieuws/bart-de-wever-reageert-op-de-verkiezingsuitslag-de-volledige-toespraak> (accessed 1 19, 2023).
- De Wever, Bart.(2022/9/24) '*Franstalige onwil*'. <https://www.nieuwsblad.be/cnt/gslhnc3f> (accessed 1 14, 2023).
- De Wever, Bart.(2022/12/10) *Bart De Wever: "We kunnen de status quo, dit Franstalige linkse feest, niet blijven financieren"*. <https://www.n-va.be/nieuws/bart-de-wever-we-kunnen-de-status-quo-dit-franstalige-linkse-feest-niet-blijven-financieren> (accessed 1 19, 2023).
- Eyskens, Mark.(2019/11/27) "Het dilemma van de N-VA: Nieuw Vlaams Belang of Belgisch Vlaamse alliantie?" *VRT nws*.
<https://www.vrt.be/vrtnws/nl/2019/11/27/nieuw-vlaams-belang/> (accessed 1 1, 2023).
- Eyskens, Mark.(2022/7/6) *De radicale taal van N-VA-voorzitter Bart De Wever*.
<https://www.vrt.be/vrtnws/nl/2021/07/06/is-bart-de-wever-zo-radikaal/> (accessed 1 14, 2023).
- Grommen, Stefan.(2021/10/9) "Tom Van Grieken (Vlaams Belang): "Als de N-VA in 2024 haar principes nog eens verloochent, kom ik die partij leegeten"." *VRT nws*.

<https://www.vrt.be/vrtnws/nl/2021/10/09/vlaams-belang-voorzitter-tom-van-grieken-als-de-n-va-in-2024-h/> (accessed 11, 2023).

Het Laatste Nieuws.(2019a/9/13) *De Grote Peiling. Vlaams Belang wipt over N-VA naar eerste plaats, dramatische score voor CD&V en sp.a.*

<https://www.hln.be/binnenland/de-grote-peiling-vlaams-belang-wipt-over-n-va-naar-eerste-plaats-dramatische-score-voor-cdenv-en-sp-a~a8e15ff7/> (accessed 2022).

Het Laatste Nieuws.(2019b/9/13) *Tom Van Grieken: "Onze missie is duidelijk: de grootste worden in 2024"*, 2019b. <https://www.hln.be/binnenland/tom-van-grieken-onze-missie-is-duidelijk-de-grootste-worden-in-2024~a6524d2c/> (accessed 2022).

Het Laatste Nieuws.(2021/5/26) *Siegfried Bracke haalt hard uit naar "Groot-Viroloog" Marc Van Ranst: "Schaamteloos haatzaaien"*.
<https://www.hln.be/binnenland/siegfried-bracke-haalt-hard-uit-naar-groot-viroloog-marc-van-ranst-schaamteloos-haatzaaien~a139a3798/> (accessed 121, 2023).

Het Laatste Nieuws.(2022/10/20) *Bart De Wever sluit coalitie met Vooruit niet uit na 2024*.
<https://www.hln.be/binnenland/bart-de-wever-sluit-coalitie-met-vooruit-niet-uit-na-2024~a8e9f909/> (accessed 119, 2023).

Logghe, Loonis.(2020) "Een tandem Vlaams Belang-N-VA in 2024?" *Samenleving & Politiek* 27, no. 2, pp.49-54.

Maly, Ico.(2012) *N-VA Analyse van een politieke ideologie*. Berchem: EPO.

Mudde, Cas.(2004) "The Populist Zeitgeist." *Government and Opposition* 39, no. 4, pp.541-563.

N-VA.(2001) *Manifest van de Nieuw-Vlaamse Alliantie*. NIEUW-VLAAMSE ALLIANTIE.

N-VA.(2014/2/27) *Monarchie*. <https://www.n-va.be/standpunten/monarchie> (accessed 114, 2023).

N-VA.(2014) *Nieuw-Vlaamse Magazine Juni 2014*. N-VA.

- N-VA.(2017) *Frequently asked questions*. <https://english.n-va.be/frequently-asked-questions> (accessed 1 14, 2023).
- N-VA.(2019/4/3) *Bart De Wever in debat met Ecolo: “Naar confederalisme bij rood Franstalig volksfront”*. <https://www.n-va.be/nieuws/bart-de-wever-in-debat-met-ecolo-naar-confederalisme-bij-rood-franstalig-volksfront> (accessed 1 14, 2023).
- N-VA.(2020/10/16) *Bart De Wever sprak met Wilfried: “België is geen democratie”*. 10 16, 2020. <https://www.n-va.be/nieuws/bart-de-wever-sprak-met-wilfried-belgie-is-geen-democratie> (accessed 1 14, 2023).
- N-VA.(2021a) *Asiel en migratie*. <https://www.n-va.be/standpunten/asiel-en-migratie> (accessed 1 17, 2023).
- N-VA.(2021b) *Inburgering en integratie*. <https://www.n-va.be/standpunten/inburgering-en-integratie> (accessed 1 17, 2023).
- STATISTIEK VLAANDEREN.(2022/4/28) "ILO unemployment rate." *STATISTICS FLANDERS*. 4 28, 2022. <https://www.vlaanderen.be/en/statistics-flanders/labour/ilo-unemployment-rate#sources> (accessed 1 19, 2023).
- Van Aelst, Peter, and Benjamin De Cleen.(2016) "Belgium. The Rise and Fall of Populism Research." In *Populist political communication in Europe*, by Toril Aalberg, Frank Esser, Carsten Reinemann, Jesper Stromback and Claes H. de Vreese. Routledge.
- Van Griken, Tom.(2017) *TOEKOMST IN EIGEN HANDEN*. Uitgeverij Van Praag.
- Vlaams Belang.(2019) *EERST ONZE MENSEN Verkiezingsprogramma 2019*. Vlaams Belang,
- Vlaams Belang.(2022a) *GASTVRIJ MAAR NIET GEK*. <https://www.vlaamsbelang.org/gastvrij-maar-niet-gek> (accessed 1 17, 2023).
- Vlaams Belang.(2022b) *EEN SOCIAAL VLAANDEREN*. <https://www.vlaamsbelang.org/een-sociaal-vlaanderen> (accessed 1 17, 2023).
- VRT nws.(2016/12/9) *Bart De Wever: "De democratie wordt steeds vaker buitenspel gezet"*.

https://www.vrt.be/vrtnws/nl/2016/12/09/bart_de_wever_dedemocratiwordtstedsvakerbuitenspelgezet-1-2839850/ (accessed 14, 2023).

VRT nws.(2016/12/8) *N-VA-campagne #iksteuntheo maakt storm van kritiek los.*

https://www.vrt.be/vrtnws/nl/2016/12/08/n-va-campagne_iksteuntheo maakt stormvankritieklos-1-2839434/ (accessed 14, 2023).

石部尚登 (2011) 『ベルギーの言語政策 方言と公用語』大阪大学出版会

津田由美子 (1994) 「ベルギーのエスニック紛争と連邦制—1993年の連邦制への移行に関する一考察」『年報政治学』45巻、pp.41-60.

津田由美子 (2017) 「ベルギーにおけるポピュリズムと地域主義政党 : フラームス・ブルック (フラームス・ベラング) を中心に」『關西大學法學論集』、66巻、5-6号、pp.1543-1566.

津田由美子 (2020) 「ベルギーの多文化政策と移民問題」『多文化主義の政治学』飯田文雄編、pp.107-145、法政大学出版局

日野愛郎 (2018) 「政党政治のダイナミズム」『現代ベルギー政治 連邦化後の20年』、津田由美子、松尾秀哉、正躰朝香、日野愛郎、pp.49-76、ミネルヴァ書房

松尾秀哉 (2014) 『物語 ベルギーの歴史 ヨーロッパの十字路』中公新書

松尾秀哉 (2015) 『連邦国家ベルギー 繰り返される分裂危機』吉田書房

松尾秀哉 (2017) 「合意型民主主義におけるポピュリズム政党の成功—ベルギーを事例に」『ポピュリズムのグローバル化を問う 揺らぐ民主主義のゆくえ』中谷義和、川村仁子、高橋進、松下冽、法律文化社

水島治郎 (2015) 『『民衆の代表』か『防疫線』か——ベルギー・フランデレンのポピュリズム政党』千葉大学法学会、『千葉大学法学論集』29巻、4号、pp.1-25.

水島治郎 (2016) 『ポピュリズムとは何か』中公新書